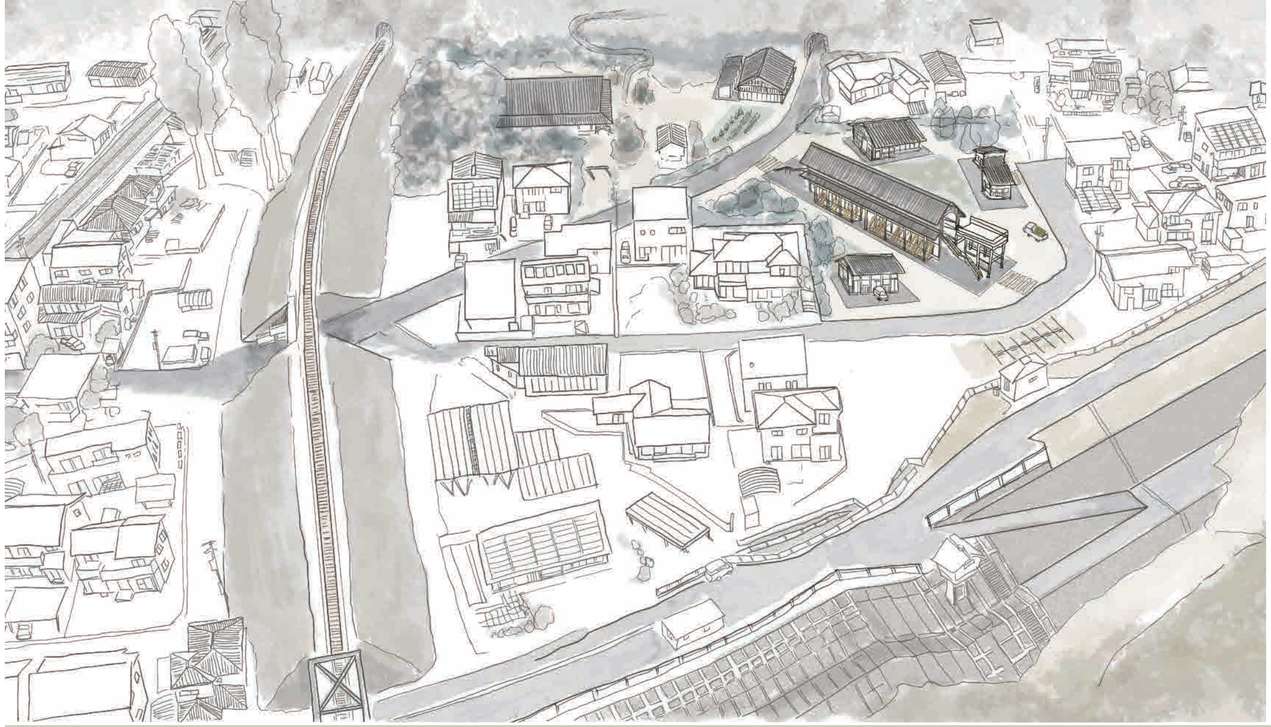
木材で今昔をつなぐ -歴史的建造物と地域材を活用した木創造拠点-

街を長年見守ってきた歴史的建造物。
周辺地域が積極的に変化していく中で、歴史的建造物が過去の遺産としてだけでなく現代の街を作る一部として活用していくことはできないだろうか。
水運・陸運の拠点として栄えた天竜区二俣町、筏問屋だった旧田代家住宅（国登録有形文化財）の昔と今を読み解きながら新たな街の拠点を提案する。



作品名	木材で今昔をつなぐ - 歴史的建造物と地域材を活用した木創造拠点 - Connecting the Past and Present with Wood	作品番号	1/5
校名	静岡文化芸術大学		
氏名	竹内 唯		

01 背景：歴史的建造物の保存が進む中で

近年、歴史的建造物の価値が見直され、保存活動が増加してきた。しかし、重伝建地区などを除き、そのような建造物は現代の街の中で点在している状況にあり、ふと街を歩き建造物に目を向けると周囲の現代的な街並みから孤立しているように感じた。そこで、時の流れで変化する周囲を受け入れながら歴史的建造物とその街につながりを与えるような提案をしたいと思い、卒業制作を行うことにした。

02 敷地選定：静岡県浜松市天竜区二俣町鹿島

かつての木材流通・交通の要衝地

二俣町は、天竜川中域、ヤマとサトをつなぐ位置にあたり、古くから水運・陸運の要衝地として栄え、現在は、栄えていた当時の建造物が点在し、それらを散策しに人々が訪れる。また、鉄道や高速道路が付近を通り、交通の要衝地であった名残を残しているように見える。

旧田代家住宅（国登録有形文化財）

田代家は、北鹿島村の名主を勤めるとともに、筏問屋を営んだ。天竜川筏下しによって全国各地に運搬する木材を扱い、木材の流通拠点となっていた。

旧田代家住宅主屋

木材を運ぶ筏師

天竜の豊富な森林

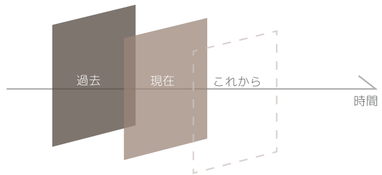
木材産業と関わりの強い天竜では、伐期を迎えた地域材である「天竜材」の利用に力を入れている。特徴は高強度である。

丁寧に手入れをされた天竜の林

03 手法：地域の個性を活かし、街と歴史的建造物をつなぐ

過去と今を読み解く

過去・現在のフィルターを通しながらこれからを考える。古くから現在に至るまで残る建造物には、当時の技術や暮らしの痕跡を見つけることができ、街が持つ固有の特徴を知る機会となる。

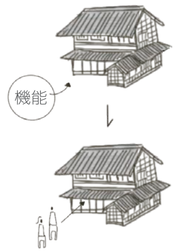


地域に適応した機能

地域にあった機能を街に落とし込むことで、歴史的建造物を街に対して開いた空間にし、建造物を一体的に利用することができる仕組みづくり。建造物と街の利用率を上げ、産業の循環・人々の交流を促す。

環境への気配り

歴史的建造物はその地域の風土に合わせて建てられたものが多いため、環境とのつながりが強い。街や建物が環境に配慮し、更新し易い計画を持続的なまちづくりへつなげる。



04 旧田代家住宅 と 二俣町 の過去と今を読む

様々な視点から過去と今を見ていく。木材の流通は街の発展と深く関係があった。木材流通は現代でも続いているが交通網の発達により、その拠点は移り変り、今はかつての拠点（旧田代家住宅）は静かに佇む。しかし、拠点としてのポテンシャルを活かし、街に対してより積極的になると街に貢献し歴史・文化を継承していく役割を担うことが可能である。

※古地図は『今昔マップ on the web』より引用

1580 年（天正 8 年） 1698 年（元禄 11 年） 1859 年（安政 8 年） 1897 年（明治 30 年） 1958 年（昭和 33 年） 2015 年（平成 27 年） 現在 これから

旧田代家住宅

徳川家康の遠州計略への強力により天竜川の筏川下げと諸役免除の特権が与えられる。

主屋が建造される

船頭宿が建築される

この頃まで筏下しが行われていた。

旧田代家住宅主屋が国登録有形文化財となる。

資料館の旧田代家住宅

歴史資料館・散策路の休憩所として活用されている。観光客向けの施設である。船頭宿は、期間限定の展示施設として活用されている。

土地の変遷

※

1889-1890 年

1916-1918 年

1938-1950 年

1956-1959 年

1975-1988 年

現在

現在は山・鉄道・川によって囲まれ、住宅が多く、閉じられた土地となっている。また、積極的に変化する場所とそうでない場所が明確である。

交通・道

鳥羽山洞門の建設（1899 年）

天竜橋の建設（1911 年）
↓
橋が架けられ、渡船の姿が消えていく。

遠州鉄道の電化とともに、東海道本線の乗り入れが可能となる。（1923 年）

国鉄二俣線の開通（1940 年）

ダムの建設（1956 年・1958 年）

木材産業

人工造林の始まり（江戸時代中期）

伐採後、製材されたものは天竜川を管流しされ河口まで運ばれた後江戸に運ばれた。

植林事業が活発になる（明治時代中期）

機械製材によって小径材の加工がしやすくなり、伐期短縮・植林推進に繋がった。二俣町が木製品製造の中心地だった。

鹿島に製材工場が発達

木材産業での発展を目指し、天竜川下げ筏曳き入れのため貯木場が建設。

二俣駅付近に大製材所が設けられる。

天竜区・北区の森林の一部が FSC 認証を取得（2010 年）

筏下しでの輸送

トラックでの輸送

木材流通の中継点としての鹿島から、通過点の鹿島となり、木材流通の歴史が色褪せつつある。
また、かつて植林された木々が伐期となり、天竜材の活用が必要とされる。

商業 街の様子

二俣村（現・二俣町）が流通拠点の末端として商業活動の拠点となっていた。（江戸 - 明治時代）

政府が各種官公署を二俣村に設置する。

二俣の街道利用が増加、宿泊施設の増加

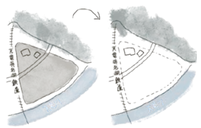
二俣の通りは賑わいを見せ、店舗数も増加

人口流出・高齢化とともに閉店する店舗が増加（二俣）

二俣の新しい店舗

鹿島の住宅

高齢化が進行しているが、二俣では、転換期を迎え、人々の流入も少しずつ増加。鹿島でも比較的新しい住宅が増加している。


閉じている土地を少し開くことで、住民・観光客ともに利用しやすい空間に。

木材産業の歴史ある地域として、木材利用を促し、地域の魅力を高める。

昔ながらの街であるが、新しいものを受け入れていく姿勢がある。その姿勢を活かし、街を継続していく。

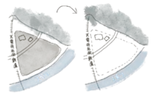
作品名	木材で今昔をつなぐ - 歴史的建造物と地域材を活用した木創造拠点 - Connecting the Past and Present with Wood	作品番号	2/5
校名	静岡文化芸術大学		
氏名	竹内 唯		

05 提案：木材置き場から始まる木創造拠点（歴史 × 創造 × 交流）

本提案は、実際の開発計画に基づくものではなく、土地・建物所有者の許可を得たものではない

地域に適応した機能を落とし込む

過去と今の読み解きより、これからについてあげた三つの要素を、さらに現在の二俣町の現状を表す分布図とともに見ることで、計画地に落とし込む機能を考える。



閉じている土地を少し開くことで、住民・観光客ともに利用しやすい空間に。

木材産業の歴史ある地域として、木材利用を促し、地域の魅力を濃くしていく。

昔ながらの街であるが、新しいものを受け入れていく姿勢がある。その姿勢を活かし、街を継続していく。

三つの軸を元にする →

飲食店の分布

木材産業の分布

駐車駐輪所の分布

住宅の多い鹿島に飲食スペースを設置することで、住人の身近な交流場、観光客の休憩所として機能させる。

Site1
文化財のおにぎり屋

筏下しを行っていた時の歴史を体感しながら木工作業をする人・観光客・暮らし体験に向けた宿泊所を設ける。

Site2
歴史体感ゲストハウス

製材所・原木市場等、仕事場としての場所は多く存在するので、木材に関する体験の場を置き、木材利用者の幅を広げる。

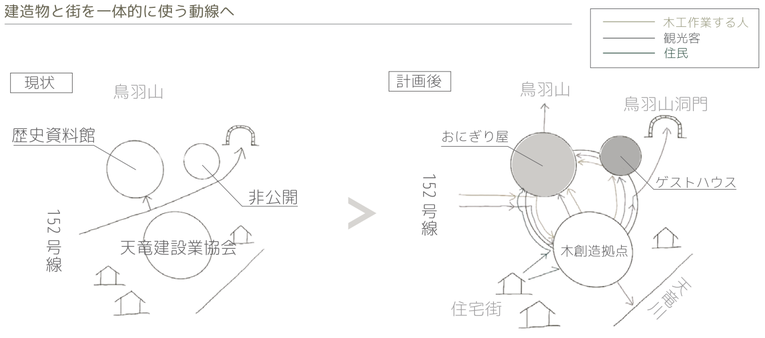
Site3
木(もく)創造拠点

歩いて回る楽しさをもつ二俣町での駐車場不足を補う。また、天竜区でサイクルツーリズムが高まり、休憩所としての駐輪場を設置する。

駐車・駐輪スペース

旧田代家住宅とその周辺の動線変化

建造物と街を一体的に使う動線へ



車と人の動線を分ける

現状

一方通行の鳥羽山洞門

計画後

拠点の駐車場を敷地南側に設ける

駐車場を拠点南側に設けることで、一方通行の道路の利用をできる限り抑え、徒歩・自転車の人の安全を確保する。

06 拠点の段階的な使われ方

歴史的建造物と現代の街が相互に利用されるような機能を取り込み、それらが一体的に利用されることで、歴史的建造物と現代の街はつながりを持ち始め、地域の特色を後継していくことが可能となる。そしてより魅力豊かな街へと続く。

歴史・街を知る　　木材を学ぶ・歴史を広める　　歴史あるものを手入れしながら使う

Site1 文化財のおにぎり屋

飲食・休憩を通して
旧田代家住宅に興味を持つ

- 周囲で暮らす人が食べにくる
- 談笑するために利用する
- 広場で遊んでいた人が休憩しにくる
- 魅力のある意匠に気づく

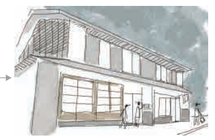
- 観光客の利用が増える
- ゲストハウスの食堂として
- 木工ワークショップの休憩
- 旧田代家住宅での木工作品展示

周辺住民と観光客が利用する空間になり
旧田代家住宅の歴史的価値が広まる

Site2 ゲストハウス

木創造拠点や食堂を利用する人が
旧田代家住宅と船頭宿の関係性を知る
- 船頭宿を一般公開する

他地域との繋がりによって
二俣町が街が栄えたことを学び
外部に対して開く意識をもつ



- 木工作業を日数かけて行う人が泊まる
- 天竜で暮らしてみたい人が体験宿泊する
- 観光客が疲れを癒しに泊まる

船頭宿を木創造拠点・食堂と
一体的に利用する

手入れされながら、街の交流拠点へ

Site3 木創造拠点

木材置き場・管理室

- 木材に触れる
- 展望台から景色を眺める
- ピクニックをする
- 花火を見る
- 駐車駐輪のために利用

周囲に住む人々が
広場として遊びにくる

木材置き場・管理室・木材を知る工房

- 木材を使ったワークショップを開催
- 木工房の設置

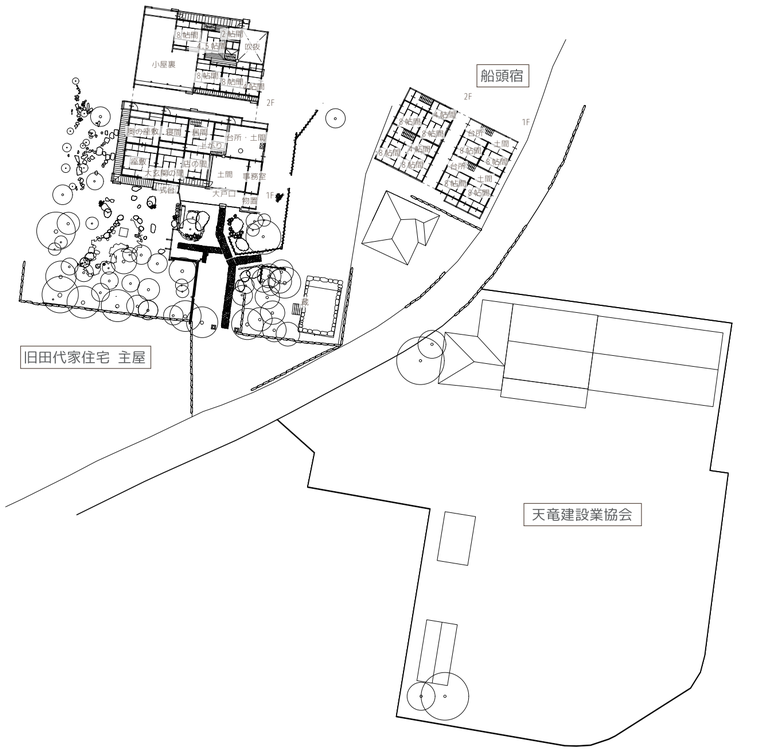
外部の人が利用し始める
天竜は木材の街であることを認識する

木材置き場・管理室・木材を知る工房・木材で創造する工房

- 建物を手入れする
ワークショップを開催
- 木工作品の数が増え、展示会を開催
- 木創造拠点で作ったものを二俣で販売

木材の地産地消が進む

07 現状図

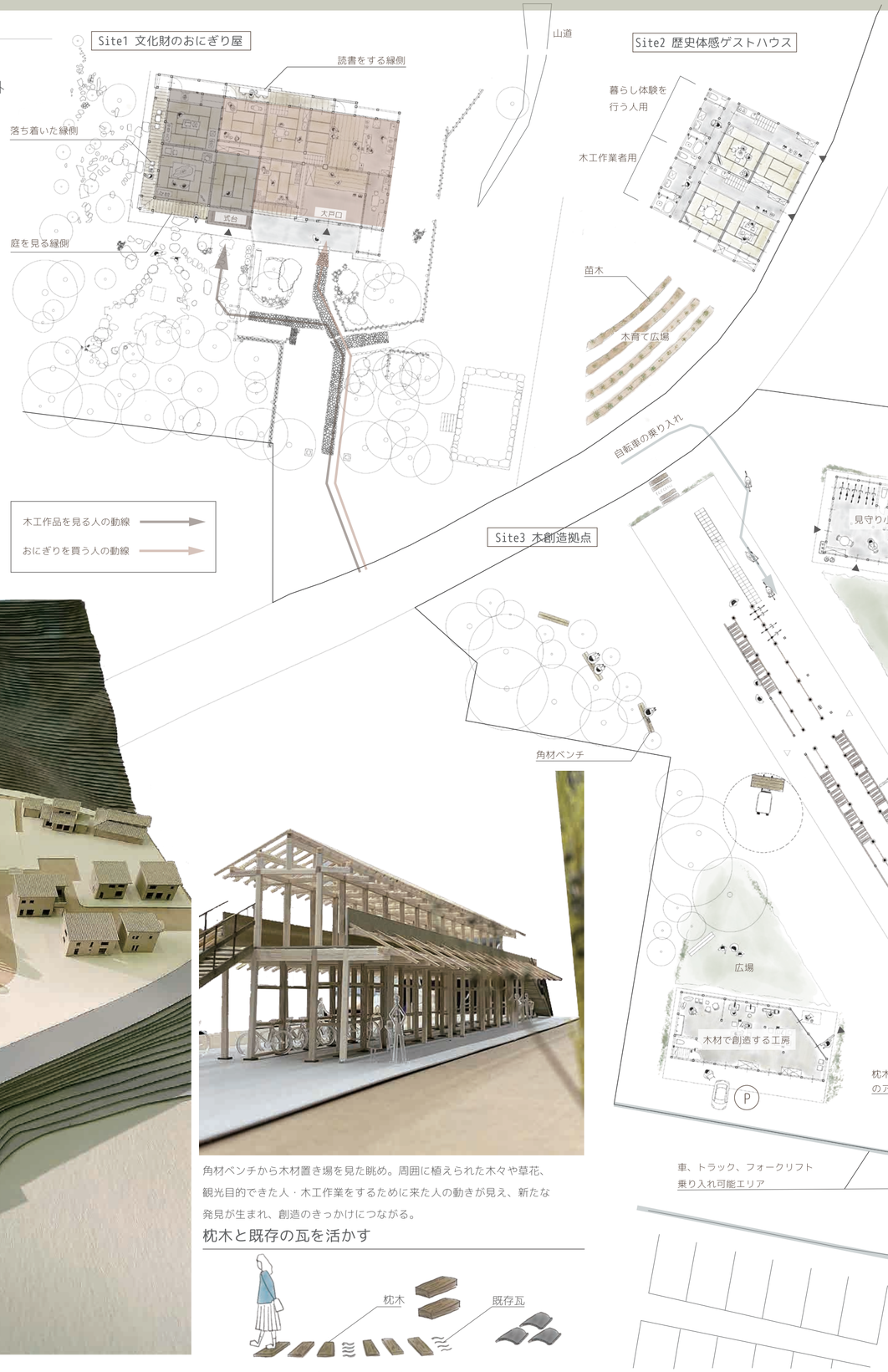


作品名	木材で今昔をつなぐ - 歴史的建造物と地域材を活用した木創造拠点 - Connecting the Past and Present with Wood	作品番号	3/5
校名	静岡文化芸術大学		
氏名	竹内 唯		

敷地全体を見る

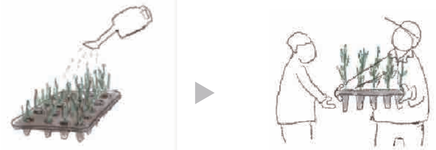
「文化財のおにぎり屋」「歴史体感ゲストハウス」「木創造拠点」それぞれの関係性を平面図とともに見ることで、建物・敷地内外の関わり合いがわかる。

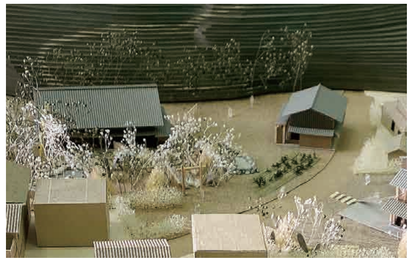
旧田代家住宅主屋の前に要衝地に見られる冠木門（かぶきもん）が建つ。周囲には緑が生い茂り、ここへ来る人を出迎える。



次の世代の苗木を育てる（木育て広場）

ゲストハウス南側に、天竜材となるヒノキ・スギの苗床を設ける。ヒノキ・スギは育てて2年未満は頻繁に水を与える必要があるため、ゲストハウスの残り湯をしっかり冷却したものを使用し、育てる。成長すると林業家の手に渡り植林される。苗木は街の人が通りかかる時に成長を確かめることができ、街の人に見守られながら成長していく。





道路に面した木育て広場は、ここを通りかかる人たちに見守られながら育つ。

幅の広い犬走りの採用は、犬走を土間のような役割を持たせることができ、自転車の空気入れ・簡単な修理を行うことができる。

フォークリフトの可動域分の道を通すことで、輸送されてきた木材をスムーズに木材置き場に立てかける。

鳥羽山の山道・敷地・天竜川への流れが連なるよう配置を計画する。

また、周囲に対して、木材置き場のボリュームを大きくすることで存在感を出し、工房のボリュームを街に合わせることで、敷地外から木材置き場を見ると工房が木材置き場の存在感に対する緩衝材のような役割を果たす。

角材ベンチから木材置き場を見た眺め。周囲に植えられた木々や草花、観光目的できた人・木工作業をするために来た人の動きが見え、新たな発見が生まれ、創造のきっかけにつながる。

枕木と既存の瓦を活かす

枕木と再利用瓦のアプローチ。旧田代家住宅裏に、たくさんの取り替え後の瓦が放置されており、これを活用する。枕木とともに瓦も地面に埋め込み、瓦特有の波形の形状を川の流れに見立て配置する。

作品名	木材で今昔をつなぐ - 歴史的建造物と地域材を活用した木創造拠点 - Connecting the Past and Present with Wood	作品番号	4/5
校名	静岡文化芸術大学		
氏名	竹内 唯		

Site 1 文化財のおにぎり屋（旧田代家住宅改修）

旧田代家住宅の伝統的な意匠を活かし、かまどで炊くおにぎり屋へ改修する。持ち運び可能な商品にすることで食べる場所を選ぶことがなくなり、空間を自由に行き来しながら過ごすことができる。木工作品展示・木製品販売を行うことで、木材利用促進を行う。

旧田代家住宅の伝統的な意匠

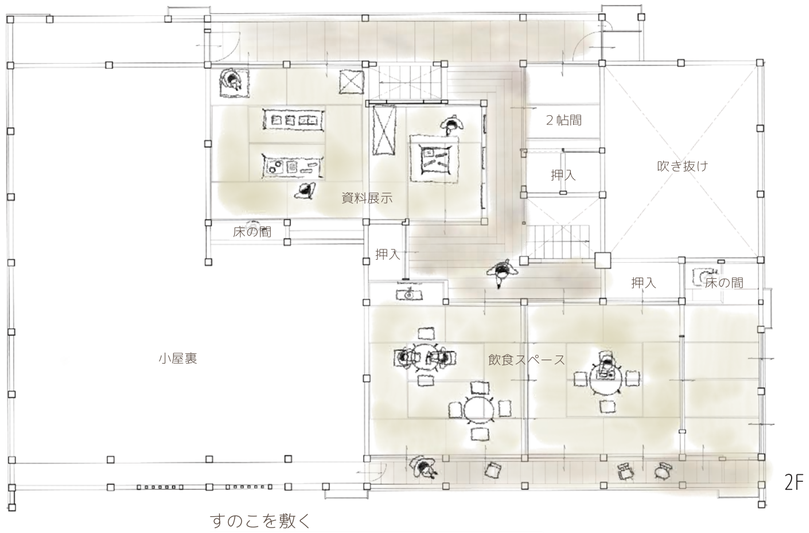
緑豊かな庭

四季を感じる床の間

開放的な吹き抜け

様々な下地窓

細かに彫刻された欄間



お品書き

天竜にゆかりのあるものも取り入れ、提供する。

- 鮎飯おにぎり
- 塩おにぎり
- 焼きおにぎり
- 地味噌を使った味噌玉

場所を選ばずに食べる

歴史的建造物を楽しむ

庭を見ながら

読書をしながら

落ち着いた縁側で

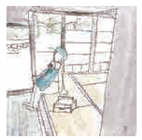
2階からの景色を眺めて

テイクアウトする

鳥羽山で

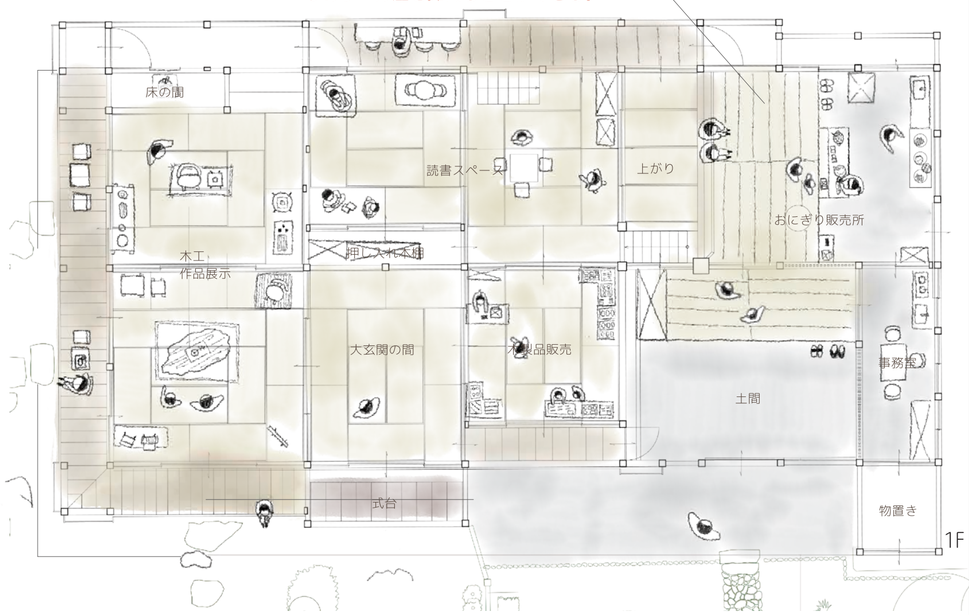
木工作業の休憩に

広場遊びの休憩に


ゲストハウスの朝食として

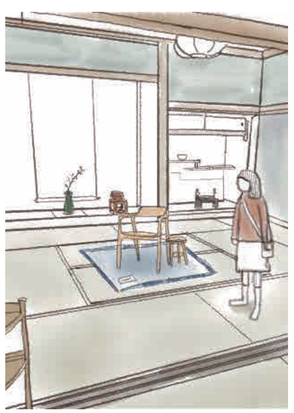
すのこを敷く

素足で動ける範囲を広げ、土間と上がりのレベル差を抑えることができる。



文化財のおにぎり屋 平面図 1/100 0 1 5 (m)

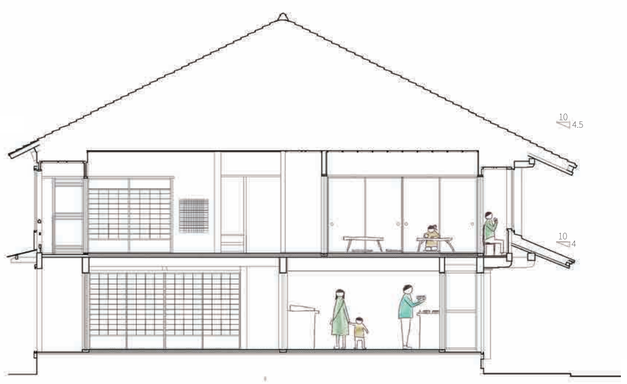
木工作品展示



展示作品は、椅子・机など家具を中心に展示され、旧田代家住宅の中で格式の高い奥座敷・座敷に置かれる。格式の高い空間により展示作品の魅また、本来客人を通すための式台と生活用の大戸との使を行うことができ、おにぎり屋利用客と展示作品見物客の動線を分けることができる。

木製品販売所

旧田代家住宅の店の間を利用し、箸・曲げわっぱ・スプーンなど食に関する天竜材を使用した製品が販売され販売品を購入し、おにぎりを購入するとそこに詰めてもらうことができる。木製品購入・使用により、伐期を迎えた天竜材の利用促進につなげる。



梁間断面図 1/200 0 2 5 10 (m)

Site 2 歴史体感ゲストハウス（船頭宿改修）

明治30年に建てられ、筏師の宿として利用されていた木造建造物である。木工作業者・二俣町の暮らし体験者に向けたゲストハウスに改修する。伝統建築・自然と触れ合いながら生活を行う。

木工作業者

近年、二俣町は外部からの流入が増加している。暮らし体験によってゆっくり、街の情報を得て、二俣町の魅力を知る。

[1日のスケジュール例]

6:30 起床 / 7:00 朝食 / 7:30 作業準備 / 8:30 作業 / 12:00 昼食 / 13:00 作業 / 17:00 ゲストハウスへ / 18:30 夕食 / 19:30 翌日の準備

二俣町暮らし体験

近年、二俣町は外部からの流入が増加している。暮らし体験によってゆっくり、街の情報を得て、二俣町の魅力を知る。

[1日のスケジュール例]

7:00 起床 / 7:30 朝食 / 8:30 洗濯 / 9:30 街歩き / 13:00 昼食 / 16:00 買い出し / 17:00 ゲストハウスへ / 19:30 夕食・団欒

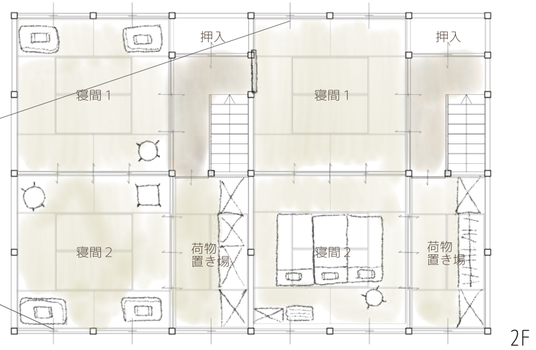
船頭宿から見える旧田代家住宅・鳥羽山洞門

寝間1より

旧田代家住宅主屋の東面が見える。

2階 寝間2より

二俣に続く鳥羽山洞門が見え、筏下しから、車での物の輸送に変化したことがわかる。



共用作業場

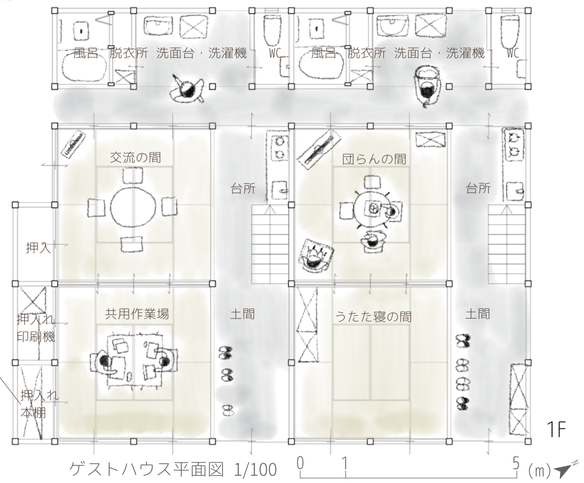
共用スペースには、木工に関する書籍や、パソコン・印刷機など利用し易い環境にすることで、翌日の作業に向けた準備を行うことができる。

押入れの活用

押入の中に本棚や印刷機を入れ、作業スペースをしっかり確保する。

水回りを外に出す

水回りを外に増築する。2軒の共用部は台所から水回り棟に行くための廊下のみであり、存在は感じられるものの、並列していることから程よく距離感が保たれる。



ゲストハウス平面図 1/100 0 1 5 (m)

水回り 桁行断面図 1/100 0 1 5 (m)

作品名	木材で今昔をつなぐ - 歴史的建造物と地域材を活用した木創造拠点 - Connecting the Past and Present with Wood	作品番号	5/5
校名	静岡文化芸術大学		
氏名	竹内 唯		

Site 3　木創造拠点

木材による体験を通して、人と木材の関わりを主体的に考え、環境・地域材理解へつなげることを目的とし、木材置き場をはじめとして、段階的に工房・木工所が増築される。そして、伝統建築の意匠を取り入れながら、歴史的建造物と街につながりを持たせるための助けとなる。

自然・建造物・街をつなぐボリューム配置

街同士をつなぐために架けられた鹿島橋・天竜川橋がある。その橋は、南北に伸び、街の象徴的な存在である。この、街をつなぐ南北に伸びたボリュームを、敷地に持ってくることで鳥羽山（山道）から建造物、天竜川までのつながりをもたせる。

フォークリフトの可動域を確保する。

旧田代家住宅の緑豊かな庭を受け継ぐ。

街の建物スケール、方向性に合わせながら、工房・木工所を増設していく。

敷地内に街に合わせるものと、象徴的なものを置くことで、山・鉄道・川に囲まれた保守的な構造をした鹿島の街に寄り添いながら、街に存在感を与える。

年月が経っても使っていけるように

取り替えて使うことを前提とした伝統工法

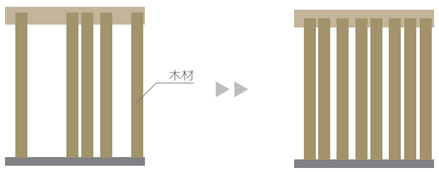
金物、接着剤等を使用せずに木材を組み合わせながら建てることで、解体し易くなり、部材の取り替えを行いやすくなる。そしてこの工法によって、手間を惜しまずに、建物を手入れしながら使っていくことの大切さを学ぶ。

建物の手入れは、ワークショップとして街の人や、他地域の人に体験してもらう。

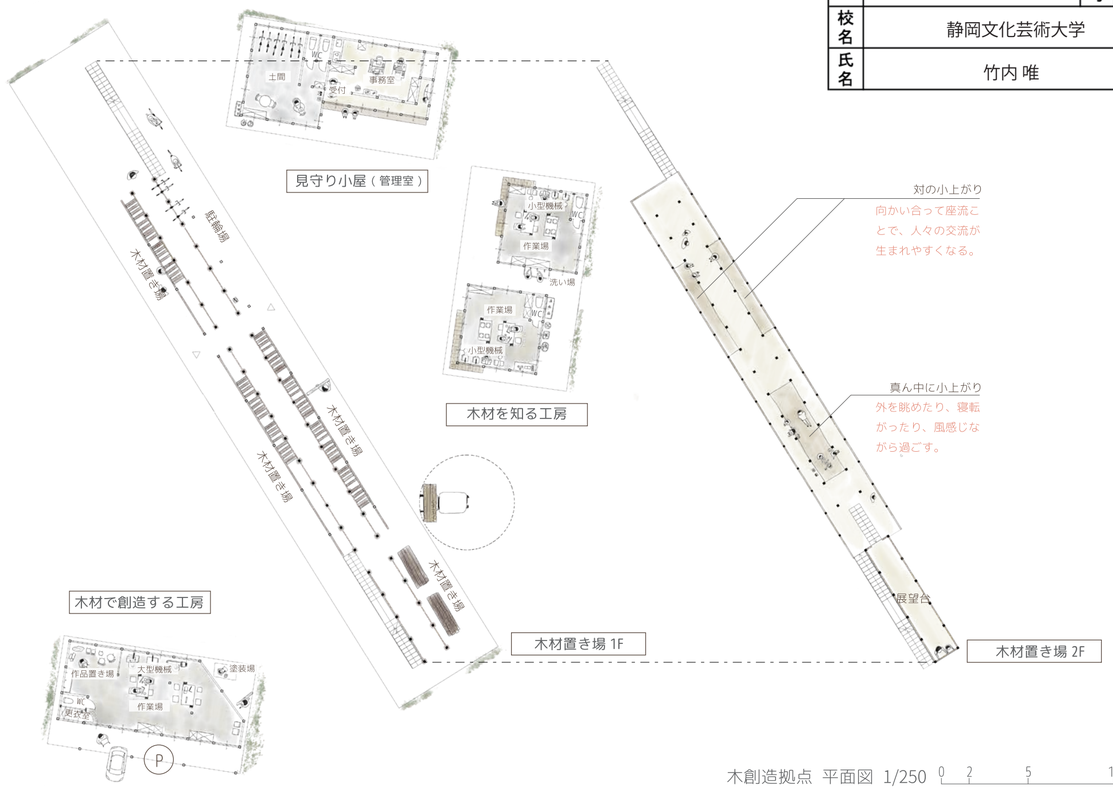
下見板の取り替え、建具を作る

木材使用量によって変化する建築風景

高齢化が進み、浜松市内で最も空き家率の高い天竜区。
ここに運び込まれる木材は、新材だけでなく、やむを得ず解体されて出た木材も対象であり、新材とともに木材置き場に立てかけられ次の使い手を待つ。木材が使用されると立てかけ場所に隙間が生まれ、木材が運び込まれると隙間が埋まる。街の変化が建築に反映される。



木材を使用する　　木材が補充される



木創造拠点　平面図 1/250　0　2　5　10 (m)

木材置き場立てかけ方法

昔ながらの木材乾燥方法

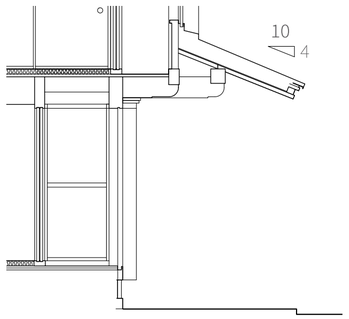
かつて、木材乾燥方法は、天然乾燥させていた。
現在では、乾燥させる機械に入れることが多いが、ここでは昔ながらの乾燥方法を採用する。天然乾燥は、木が本来もつ粘りや香り、色艶を残しつつ、油分を保つことがメリットである。
また、立てかけることで乾燥スピードをあげることができる。

木材を立てかけて乾燥させている風景

富嶽三十六景より

旧田代家住宅の出し桁を活かす

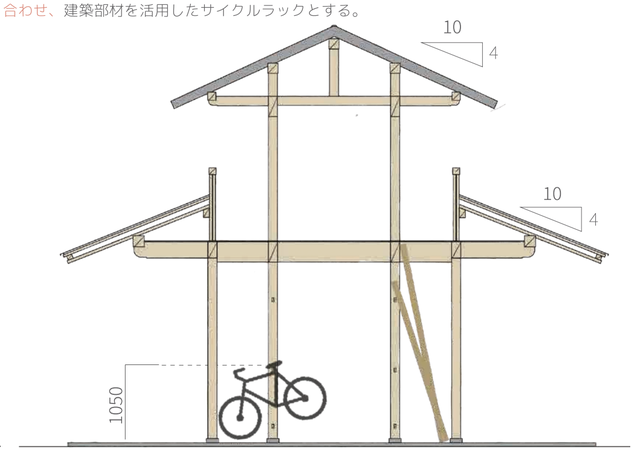
旧田代家住宅には、軒の出を大きくするために出し桁が見られるが、この意匠を木材置き場にも採用し、ある程度の雨や直射日光を避け、木材の割れや反りから守る。



旧田代家住宅　軒　断面図 1/100
0　1　5 (m)

貫を利用した自転車置き

天竜ではサイクルツーリズムが高まり、他地域からサイクリングのために訪れる人も多い。サイクリング客の休憩所としても敷地を解放するため、サイクルラックを設ける。貫の高さを自転車を掛けることができる高さに合わせ、建築部材を活用したサイクルラックとする。



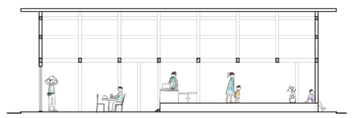
木材置き場 梁間断面図 1/100　0　1　5 (m)

根太天井を用いる

根太天井にすることで、架構が顕になり、奥へと長く続くその架構に人々が引き込まれる。

見守り小屋（管理室）

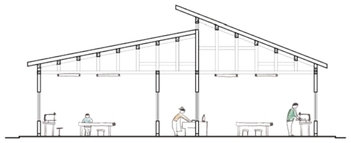
木工房・木工所・レンタルサイクルの受付を行う。広場に向かって縁側があり、木創造拠点を利用する人を見守りながら、管理などを行う。



見守り小屋　桁行断面図 1/200　0　2　5 (m)

木材を知る工房

小さな材を使いながら、木の小物を制作ができる。糸鋸など小型機械を設置し、木工が初めての人や子供が体験し易い工房である。

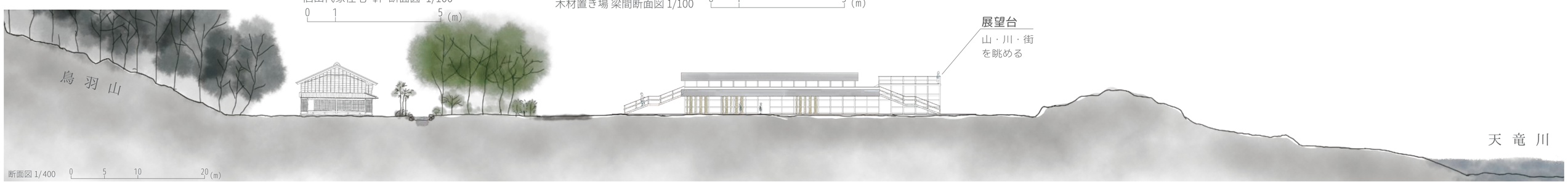


木材を知る工房　梁間断面図 1/200　0　2　5 (m)

木材で創造する工房

椅子や机など、家具程度の大きさのものを制作することができる。ベルトサンダーなど大型の機械や、塗装場があり、DIYが趣味の人や、木工作家の人が利用し易い工房である。道路に面しているため、車の乗り入れが可能。

木材で創造する工房　梁間断面図 1/200　0　2　5 (m)



断面図 1/400　0　5　10　20 (m)